



ショートコメント

★★★

Data 2025-108

ハード・トゥルース 母の日に願うこと (Hard Truths)

2024年ノイギリス映画

配給：スターキャットアルバトロス・フィルム/97分

2025 (令和7) 年 11 月 15 日鑑賞

テアトル梅田

監督：マイク・リー

出演：マリアンヌ・ジャン＝
バプティスト／ミシ
エル・オースティン／
デビッド・ウェバー／
トウウェイン・パレット
ト／アニー・ネルソン
／ソフィア・ブラウン

👁️👁️ みどころ

「世界の映画祭での驚異の 27 受賞・57 ノミネート!!」の本作は必見！そう思ったが、夫や息子に毎日不平不満ばかりがなりたてている(？)、ロンドンに住む黒人一家のおばさん(ヒロイン?)にうんざり！こりゃ、“厚かましさ”で世界的に有名な“大阪のおばちゃん”以上だ。

チラシには、「心の痛みとその欠片を、ユーモアと優しさで鮮やかに描く、珠玉のヒューマンドラマ」の文字が躍っているが、本作後半に訪れる「母の日」の出来ごと(物語)も、私にはイマイチ納得できないことだらけだ。このおばさん、一体何がそんなに不満なの？そして、「母の日に願うこと」とは？また、タイトルにされている『ハード・トゥルース (Hard Truths)』とは一体ナニ？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆本作のチラシには、「アカデミー賞 7 度ノミネート 82 歳の巨匠マイク・リー、最新作にして演出の極致とも言うべき至福の逸品 心の痛みとその欠片を、ユーモアと優しさで鮮やかに描く、珠玉のヒューマンドラマ」、「ショーン・ベイカー、ケン・ローチ、グレタ・ガーウィグ・・・名だたる映画監督に影響を与えてきた巨匠マイク・リー、最新作にして最高傑作!!」の見出しが躍り、次のとおり紹介されている。

監督は、これまでカンヌ・ベネチア映画祭で最高賞を獲得し、アカデミー賞に7度ノミネートされた巨匠マイク・リー。ショーン・ベイカー、グレタ・ガーウィグなど、今の映画界を牽引する監督たちに影響を与えてきた巨匠が、これまでの集大成とも言うべき極上のヒューマンドラマを作り上げた。バンジー役は、96年のリー監督作「秘密と嘘」で、アカデミー助演女優賞ノミネートなど高く評価されたマリアンヌ・ジャン＝バプティスト。リー監督とはそれ以来のタッグとなる本作では、ニューヨーク、ロサンゼルス、ロンドンなど主要の映画批評家協会賞の主演女優賞を獲得、キャリアにおける最高の演技が高く評価された。社会の片隅で生きる庶民たちを描き続けてきた巨匠が描く、希望の人生賛歌。

また、本作は「世界の映画祭での驚異の 27 受賞・57 ノミネート!!」と強調されている。さらに、「今年、最高に素晴らしい作品—RogerEbert.com」、「日常に美しさを見出す、まさに職人技—The Independent」、「ラストに至る感情の軌跡が激しく胸を打つ—BBC」等の各社からの賞賛の声が載せられている。これらを見れば、何が何でも本作は必見！

◆次に、映画紹介サイト「CREATORS MOVIE MAGAZINE intoro」によれば、マイク・

リー監督について次のとおり紹介されている。すなわち、

監督のマイク・リーは過去の『秘密と嘘』、『家族の庭』といった代表作でも、家族の絆を通じて、社会の片隅で生きる庶民たちの真実を描き続けてきた。この作品でも、いつも通り撮影前は脚本を用意せず、俳優との即興的なリハーサルを重ねることで物語の骨組みを作り上げる。そんな独自の手法を通じて人間のリアルな感情に迫っていく。その斬新で大胆な映画作りは、ショーン・ベイカー、グレタ・ガーウィグといった名だたる監督たちにも影響を与え、世代が少し上のイギリスの名匠ケン・ローチと共に庶民たちの人間模様を見つめ続けてきた。80代となった彼は、今回、初めてロンドンで生きる黒人たちの日常生活をテーマにし、まさに演出の極致ともいうべき至福の逸品を作り上げた。静かながらも、ユーモアもあり、感情を強く揺さぶる稀有な展開で、その職人芸を発揮する。救いと希望も感じさせる屈指の傑作が誕生した。

私はケン・ローチ監督の作品は大好き。また、マイク・リー監督の『ヴェラ・ドレイク』(04年)『シネマ 8』335頁)素晴らしい作品だった。すると、この点からも本作は必見!?

◆前述の紹介サイトによると、本作のキャッチコピーは、「あなたを理解することは出来な
いけれど、それでも、わたしは愛している。」。そして、本作のストーリーは次のとおりだ。

舞台は現代のロンドン。パンジー (マリアンヌ・ジャン＝パプティスト) は配管工の夫、カートリー (デヴィッド・ウェバー) や 20 代の無職の息子、モーゼス (トゥウエイン・バレット) と一緒に暮していた。いつも怒ってばかりの彼女は朝から家族にも小言ばかり。外出しても、パンジーの怒りは収まらない。そんな彼女には美容師の妹、シャンテル (ミシェル・オースティン) がいるが、彼女は姉とは対照的な陽気な性格。シングルマザーの彼女はふたりの娘と暮しているが、家庭内では笑いが絶えない。母の日がくると、シャンテルの提案で、パンジーは亡くなった母、パールの墓参りにしぶしぶ出かけるのだが・・・。

なるほど、なるほど。

本作は英語のセリフだが、舞台がアメリカではなくイギリスであることは、息子のモーゼスと共に配管の仕事に出かける夫のカートリーの車が右ハンドルであることからすぐにわかる。冒頭から雨嵐のように降り注ぎ続けるパンジーの容赦ない夫や息子に対する罵倒の言葉にはいささかうんざりだが、この黒人一家が住んでいる家は2階建ての瀟洒なもの。小さいながらも庭がついているし(もっとも駐車場はついていない?)、築浅物件のようだから、この黒人一家の収入はHow much?ケン・ローチ監督もマイク・リー監督も労働者階級に寄り添っているはずだが、なぜ本作の主人公たるこの黒人一家は、ロンドンでこんな立派な戸建ての家に住んでいるの?それが当初から私には不可解だ。

◆導入部から中盤にかけて、スクリーン上で爆発するのは、パンジーのイラつきや怒りそ

して不平不満ばかりだから、私はかなりイライラ。パンジーが夫や息子に対して長年積み積もった不平不満を持っていることはわからないでもないが、それをスクリーン上で爆発させて観客に見せても、観客は一体ナニが面白いの？

ずっとそう思いながらスクリーンを観ていると、中盤からはそんなイライラした姉を優しく見守る妹のシャンテルが登場し、優しく姉を見守りつつ、最後には「あなたを理解することは出来ないけれど、それでも、わたしは愛している。」との“殺し文句”が登場するので、それに注目！

◆私の子供時代、「母の日」には必ず母親へのプレゼントを欠かさなかった。しかし、イギリス・ロンドンの黒人家族の中で、「母の日」はどこまで定着しているの？妹のシャンテルにとって、「母の日」には自分が子供たちから祝ってもらうことよりも、姉のパンジーと共に亡くなった母親のお墓参りをするの方が大切そうだが、パンジーはそれすら面倒



そうだ。さらに、せつかく 2 人揃っての母親のお墓参りを済ませた後、シャンテルの家に集まり、シャンテルの 2 人の娘たちと軽く食事しようとしても、パンジーはそれすら面倒そうだから、アレレ、アレレ。本作を見ている限り、トコトン性格の悪い

(?) 姉のパンジーと対比される妹のシャンテルの優しさと思いがり目立つが、なぜ同じ姉妹でここまで違うの？私は本作後半もずっとそんな思いでスクリーンを観ていたが、一体本作のラストは如何に？それは私の目には意外にあっけないものだったから、「世界の映画祭で驚異の 27 受賞・57 ノミネート!!」された“珠玉のヒューマンドラマ”だという本作の売りに、私は結局納得できないまま鑑賞を終わることに。そもそも、原題でもあり邦題にもなっている『ハード・トゥルース (Hard Truths)』とは一体ナニ？それすら、私には全然わからなかったが・・・。

2025 (令和 7) 年 11 月 19 日記